

ロケット軍ニュース：台湾のキッド (Kidd) 艦が中国のミサイル攻撃を受ける
漢和防務評論 20161205 (抄訳)

阿部信行

(訳者コメント)

本日 (12月11日)、中国が空自スクランブル機の妨害弾発射を非難、とのニュースがありました。
状況が不明なのでコメントはできませんが、単にフレアーだとしたら中国戦闘機が敵対行動をとったからではないでしょうか？以前、米軍 EP-3 機に中国戦闘機が後下方から追突した際も、EP-3 が中国戦闘機に衝突した、と中国は主張していました。
今日の記事は、中国ロケット軍 (元第二砲兵) が台湾の軍港に見立てた標的に向かって短距離弾道ミサイルを打ち込む訓練を行っているニュースです。中国の弾道ミサイル及び巡航ミサイルは次第に命中精度が高くなっているとのことです。

KDR 東京特電：

中国ロケット軍は、2014年からロブノール砂漠地区にあるミサイル射場に、仮想敵 (台湾) 軍港、航空機掩体、エプロン等々の攻撃目標を設置している。射場全体の大きさは、縦横 20KM はあり、世界最大の弾道ミサイル、巡航ミサイル射場といえる。射場の模擬 “軍港” には、3 艘の仮想大型水上艦が出現した。2014年のミサイル発射試験で集束爆弾が使用されたような燃焼の痕跡がある。3 艘の大型水上艦模型の大きさは、基本的に皆同じで長さ約 170M、幅 16.7M である (本物のキッド艦の長さは 172M、幅は 17M である)。このことから、中国第二砲兵部隊は、弾道ミサイル、巡航ミサイルを使用して、特に 4 艘のキッド艦を具体的な目標として、台湾の軍港に対する攻撃訓練をしていることが分かる。KDR がこの “軍港” 模型と実際の台湾左営、基隆軍港を詳細に照合した。その結果：射場模型は左営軍港を完全に模擬したものではなかった。實際上、その必要はない。攻撃目標は移動中の軍艦だからである。しかし中国空軍の鼎新飛行場には模擬 “清泉崗飛行場” が建設されている。

第二砲兵のミサイル射場を見ると、飛行場や軍港に対する攻撃を含め、中国が台湾をミサイル攻撃する際の各種戦役、戦術が見えてくる。今日の中国弾道ミサイルの精度に照らせば、特に DF-15C、DF-16 等の短距離戦術ミサイルは、港に停泊中の大型軍艦を攻撃し直接命中させる能力がある。

上述ミサイルの構造から見て、高精度の慣性誘導 + 終末簡易軌道修正技術を用いれば、CEP 50M 確保も可能だ。もし DF-16 に終末レーダー画像誘導技術を

採用すれば、命中精度は 10M 以下も可能である。今後弾道ミサイル及び巡航ミサイルがミッドコースで“北斗”衛星誘導システムを採用すれば、CEP 6M 以下も予見出来る。

射場の設置状況から見ると、ロケット軍の弾道ミサイルの命中精度は日増しに高まり、弾頭の種類も増加していることが分かる。ある長方形の大型模擬目標を見ると、4つに分割され、それぞれが 100M×100M の大きさになっている。その中に 2 種類の弾痕が見える。KDR の分析では、高性能爆弾の弾頭と、集束爆弾の弾頭の攻撃による痕跡と思われる。このことから第二砲兵が設定した爆撃の範囲が判断できる。すなわち CEP を 100M 及び 50M に設定している。今後、誘導技術の向上に従って CEP が逐次縮小される可能性がある。

堅固な格納庫として 2 種類の模擬格納庫が作られている。米軍沖縄基地の F-15 格納庫と台湾空軍 F-16 格納庫である。直撃を受けた場合貫通するかどうか？評価することはできなかつた。この点は多少意外なことであつた。空軍の射場では、レーザー誘導爆弾、ミサイルを使って類似の攻撃を行うことができる。しかしより高価なロケット軍の弾道ミサイルで格納庫を攻撃することは、コストが相当高くなり、CEP も 10M 以下でなければならない。このことは、短距離弾道ミサイルは終末段階で光学、及びレーダー画像誘導技術が必要になることを意味する。第二砲兵時代の学術雑誌には、早い時期から戦役、戦術ミサイルの終末段階の光学、レーダー画像誘導技術の原理及び技術に関する討論が行われていた。パキスタンの巡航ミサイルですら、終末地形照合技術が採用されている。

別の実行可能な手段は巡航ミサイル攻撃である。飛行の終末段階で、攻撃角度を調整する方式により、格納庫の頂部を攻撃する。米軍の TLAM-D に類似し終末飛行に 3 種のモデルがある。もし真に DH-10 の類の巡航ミサイルが類似の攻撃を行ったのであれば、中国の巡航ミサイル技術が進歩していることを表している。

電力線に対する模擬攻撃は、過去に何度も行われている。この種の攻撃は通常炭素繊維爆弾が使われる。北方工業会社の開発した輸出型航空爆弾には炭素繊維弾頭、燃料気化弾頭の型式がある。最近、中国官方テレビが短距離弾道ミサイルの攻撃場面を放映した。そこでは 2 種類の弾頭が使われ、1 種類は格納庫を攻撃し巨大な火災を引き起こした。燃料気化爆弾等は、火種に引火させることができる。別の種類の集束爆弾は散布面の長さが 100M 以上であつた。

これらの攻撃演習は、当然、“戦区隔離”の意図があり、対沖縄米軍基地或いはその他駐日米軍基地の攻撃を模擬している可能性がある。

2014 年は中国と馬英九政権の蜜月時代であるが、中国軍は、継続してこのように厳密な対台湾攻撃準備を行っていた。

第二砲兵の戦役、戦術ミサイルは、レーダーシステムへの攻撃など、ひたすら対輻射型目標探知方式の弾頭開発を行ってきた。空軍は、すでに YJ-91 型対輻射ミサイルを装備しており、早期の対輻射型弾頭技術はロシアから輸入した。中国電子工業輸出入公司是、10 年前から、模擬レーダーに使用するレーダー信号模擬発射器を輸出していた。これは外国で何度も簡易説明書を展示していた。しかし 2014 年の衛星写真を見ると、上述の第二砲兵射場では未だ大型の模擬レーダーは発見されていない。

以上